

第6回国際絞り会議 ISS-2005 JAPAN SHIBORI—創世と進化—



ウェアラブルアート展会場



ヨーガンレール見学



捺染工場見学



会場風景

The 6th International shibori symposium は2005年5月14日より22日まで東京での本会議と名古屋有松・鳴海でのポスト会議を合せて開催された。1992年第1回の国際絞り会議が名古屋で立ち上げられて以来、第2回会議をインドで、第3回をチリ、第4回をイギリス、第5回がオーストラリアで開催されてきたが、第6回は海外からの熱いコールに答えて久方に日本で開催されることになった。絞り技法は世界の様々な国にその源をみることが出来る染織の原点のようなものであるが、今日では日本語である絞りが“SHIBORI”と世界共通語にもなった歴史がある。

今会議のテーマは〈SHIBORI—創世と進化〉

SHIBORIをキーワードに生産者、デザイナー、アーティスト、研究者、キュレーター等の専門家から次世代を担う学生、更に染織を愛する人々や繊維産業を支える企業関係者まで世界22ヶ国より、内外合せて500人余の人々がこの会議に参加し“テキスタイル・クリエイションの問題点”や“今日と未来”について語り合った。伝統的な仕事は勿論であるが、今日では古典的なイメージを大きく超えて広くファッションやインテリア・ファブリックスをはじめテキスタイルデザインの最前線で先端テクノロジーと結びつき熱くクローズアップされている。むしろ日本の社会では一般的に浴衣や着物にまつわる伝統的な絞りの認識が強く、新しい動きにうといのではないかと思った。しかし Issey Miyake や菱沼良樹の仕事をはじめ多くのファッションデザイナー達が絞りのテクスチャーを応用し、進化をうながしているのだが気付いていない人が多いように思う。会議は世界で注目される三人の基調講演者 ホリー・ホッチナー（ニューヨークのアートアンドデザインミュージアムの館長）、バジリス・ジデアナキス（話題のファッション展を企画したギリシヤのキュレーター）、皆川魔鬼子（イッセイミヤケ取締役、日本を代表するテキスタイルデザイナー、多摩美術大学教授）をはじめパネルディスカッション、14のシンポジウム、9つのワークショップ、8種の見学ツアー、12の展覧会、パフォーマンス等多彩なイベントが演出された。外務省、文化庁、経済産業省、NHK、各新聞社、文化財団企業など多くの後援を受けたが、TDAも後援に名を添えた。はからずもこの国際会議の実行委員長を受ける羽目になったが、大任を無事終えることができ会場を提供して下さった多摩美術大学や、協力下さった方々に心からの感謝を述べたいと思う。この会議を通して世界の新しい仕事師達や様々な専門家と出会い交流し、その技と思考を学び、刺激し合えたことは繊維文化と繊維産業の未来に一筋の光明をみることが出来たのではないかと思っている。

（わたなべ ひろこ）